

研究報告

臨床工学技士志望学生における生命倫理観

ーセルフナラティブ・ラーニングの試みからー

安林奈緒美

中部大学非常勤講師

メディカルエンジニアリングリサーチ部門；第3領域（医療社会学）

要 旨

本研究は、講義科目「生命倫理学」のインストラクショナルデザインとしてセルフナラティブ・ラーニングを考案し、分析、評価の一連のデザイン実験を通じて、臨床工学技士志望学生の生命倫理観を探究した。本学習方法のコース全体の評価は、質問紙調査により行った。あわせて、本学習の達成度と基礎的知識の習得度との関連性についても検討を行った。結果は、「転移」「学習体験」「態度変容」ともに有効であり、基礎的知識習得度との関連性においても有効であった。臨床工学技士志望学生の生命倫理観を分析すると、学生が取り上げた生命倫理のトピックに偏りがみられ、現代医療の喫緊課題との関連性が高い生命倫理の問題を取り上げる学生が少ないことが判明し、臨床工学技士養成教育が目指すべき方向性が示唆された。

1. はじめに

教育は一方的語りかけという病に陥っていると言ったのは、「被抑圧者の教育学」を記したパウロ・フレイレである。「教師—生徒の関係が基本的に一方的に語りかけるという特徴をもっていることは、その関係をあらゆるレベルで、学校の内外問わず入念に分析すれば明らかになる。この関係には、語りかける主体（教師）と忍耐強く耳を傾ける客体（生徒）が含まれている。語りかける内容が、価値についてであろうと現実に関する経験的事柄についてであろうと、それらは語りかけられる過程で生気を失い、硬直してしまう」¹⁾と言うのである。フレイレは、教育を銀行型教育と問題提起型教育とに分け、知識を預金行為と同様に詰め込んでいくスタイルの教育を批判した。

教育者と被教育者との間には、知識を持つ者と持たざる者ではあるが、人間の実存性として対等であることは言うまでもない。しかし、フレイレが言うように教育が一方的語りかけという病にかかっているとすれば、教育をコミュニケーションの観点から再構築することが求められる。

本研究では、その手掛かりとしてインストラクショナルデザイン Instructional Design、ID)^[1]の理論に立脚した学習方法を考案し実践と分析を行った。筆者は、これを「セルフナラティブ・ラーニング (Self-narrative learning)」と呼ぶことにする。

2. ID とは何か

ID は、教えるという行為とその成果を研究対象とするもので、次のような3つの基本前提がある。①学習は多くの変数に左右される ②にもかかわらず、効果的に学習を支援する方法はある ③そして、その支援の方法は常に改善できる²⁾。上記3つの前提に基づいてインストラクションが効果的に成立するように授業のシステム全体をデザインしようとするものである。

また、IDは「教育工学」の一つの領域でもある。教育工学の特徴的な研究方法は、デザイン実験 (Design Experiment) である。このアプローチは研究倫理の上で統制群を設定できないので研究の限界があり、デザインと効果との因果関係の特定は困難かもしれない。しかし、個別の授業実践ではあるが、さまざまなデータを収集し、

そのプロフィールを描き貯めていくことで、やがて事例が蓄積され理論生成される。その結果、学習理論へのフィードバックが可能となるのである。

3. セルフナラティブ・ラーニングとは何か

セルフナラティブ・ラーニングとは、自己のナラティブ(語り、物語)を記述すること(セルフナラティブの記述)で、講義科目がめざす到達目標をゴールとする学習方法であり、科目の抽象的な理解(抽象化)から具象へと自己の体験に引き付けて理解(具象化)することを目指す学習方法である。

本科目の場合、セルフナラティブのメインテーマを「生命倫理(学)とは何か/生命倫理(学)を考える」とし、サブテーマは科目「生命倫理学」を探究できるトピックを学習者が個人的かつ自由に設定するように促した。セルフナラティブの記述を通して、科目に対する自己の理解を読み手に示すことが目標であることを伝達した。尚、記述の分量は1000文字以上、上限無しとした。

4. 事例研究―「生命倫理学」

4-1 研究対象

- ・本学生命健康科学部臨床工学科4年生(42名)
- ・科目「生命倫理学」8コマ集中講義形式

4-2 IDによるコースの設計-6要素について

コースとは複数のインストラクションの組み合わせから成るものとする。

i) ニーズ

IDからは学習者のニーズ、組織のニーズ、社会のニーズ、領域専門家からのニーズが考えられる。本研究はカリキュラム上の講義科目であるため、特に「領域専門家からのニーズ」は、将来医療に携わる人間として身に付けるべく倫理および生命観を医療の側面から考究することができる能力の獲得である。一方、「学習者のニーズ」は、こうりたいという学習者のニーズということになるが、学習者の求めにより、カリキュラムが作成されるのではないため、学習者のニーズというより、入学から卒業まで4年間の臨床工学技士の専門性の学びの中でどのような生命倫理観を形成してきたのか、という点が

本研究の中心的問いとなっている。

ii) ゴール

IDにおける教育ゴールは、「条件」、「行動」、「基準」から考える。即ち、医療現場において臨床工学技士の立場(条件)から、患者の生命を倫理的に考究し、医療チームの一構成員として適切な連携力を発揮する(行動)ために必要なヘルスコミュニケーション能力を備え、状況に応じた適切な判断ができる力(基準)を習得することをゴールとした。

iii) リソース

リソースとは、学習者が学習の際に提供を受ける学習資源のことである。本科目の場合ゴールへ導くためのリソースは、①科目「生命倫理学」に関する基礎的知識や概念理論 ②ナラティブという思考に関する講義 ③テキスト ④新聞記事である。

iv) 活動

グループ討論、ワーク(ケーススタディ)、セルフナラティブの記述

v) フィードバック

学習活動においては、学習者からのアクションに対し、教授者が何らかのリアクションを返すというフィードバックの働きは、行動分析的には「強化」としての役割、認知心理学的には「情報」としての役割、状況的学習(Situated learning: 学習を社会的な営みとして捉え直した広い意味での学習)論的には「コミュニケーション」としての役割が大きい³⁾。

本コースでは、ワーク(生命倫理のケーススタディ)を行う際、またセルフナラティブの記述の際、学習者の疑問にきめ細かく回答し、教授者も共に学び共に考える者という関係を維持した。

vi) 評価

学習者検証の原則(学習者の学習成果そのものによって評価する)に基づき、本コースそのものを評価する。具体的測定項目は「転移(領域可能性 domain-specificity)の学習内容が領域を超えて別の場面でも利用可能となること」「学

習体験(ARCS 動機づけモデル:Attention 注意 Relevance 関連性、Confidence 自信、Satisfaction 満足感)「態度変容(学習成果とは別に、内容を嫌いになっているか、好きになっているか)」

4-3 研究結果の分析および考察

セルフナラティブの記述後に質問紙調査を行った。質問への回答を ID における評価の観点に基づいて、「セルフナラティブ・ラーニング」のコースデザインを評価した。

1) 評価方法

- ・学習成果:知識確認テスト
- ・「転移」「学習体験」「態度変化」:セルフナラティブおよび質問紙調査の分析

2) 分析方法

質問紙記載内容の分析には、質的分析手法 SCAT を用いた(分析過程については紙幅の都合上省略する)。

3) 分析結果

「学習成果」

セルフナラティブの完成度が高い学習者は、基礎的知識の習得度も高く、両者の間には相関関係が認められた。

「転移」

多くの学習者に、今後の人生の中でナラティブの考え方が役立ち、職業上においても自己が目指す臨床工学技士像を明確化し、何故この職業を選択したのか初心に回帰するという転移が見られた。

「学習体験(ARCS)」

A:聞きなれない「ナラティブ」という語に抵抗を示す学習者の声があった。

R:今後の人生に役立つであろうと自己の生活や人生との具体的な関連性を強く意識するようになったとの自己の変容を示す回答が多くみられた。

C:はじめ多くの学習者は、セルフナラティブが記述できるかどうか不安を示したが、個別にフィードバックを繰り返す中で、しだいに自信をつけ

ていった。

S:セルフナラティブを記述して自己の体験を意味づけながら振り返ることができ、過去の体験に整理がついた。他の科目の学習にも使ってみたいとの回答が多くみられた。

「態度変容」

セルフナラティブの記述は楽しかった。作家になったような気分を味わった。書き出したら規定の分量以上に書いてしまった。今後も時々セルフナラティブを書いてみたいとの回答があった。

セルフナラティブの記述から読み取れた臨床工学技士志望学生(4年生)の生命倫理観の一端を示すために、学習者が記述したサブテーマを以下に挙げる。

終末期医療(4名)、ペットの死(4名)、出生前診(2名)、延命治療(2名)、透析中の拘束(2名)、以下、各1名

- ・救えなかった命から考えたこと
- ・幼い頃の入院生活を経て
- ・死について
- ・医療現場における生命倫理
- ・インフォームドコンセントとは
- ・ネットと依存性
- ・患者中心の医療の意味
- ・緩和ケア
- ・自分と他者との生命倫理のずれ
- ・親族の死
- ・終末期医療における在宅ホスピス
- ・死刑とは
- ・未熟児を生きる(無題のため筆者解釈)
- ・安楽死
- ・正しい選択
- ・自分が目指す医療従事者
- ・消えかけの蠟燭に灯火を
- ・一つの命を通して
- ・安楽死尊厳死について
- ・私の選択と生命倫理
- ・いじめとは

- ・死ぬとは
- ・私と死
- ・生きることとは
- ・戦争殺人
- ・在宅介護について
- ・医療における「死」

5.おわりに

今後の研究の方向性を示して本稿を閉じる。様々な科目についてセルフナラティブ・ラーニングをデザインし、その実践および結果の分析を行い事例を蓄積する。そして、学習理論へとフィードバックし、さらに理論を発展させていく。それを踏まえて、より完成度の高いセルフナラティブ・ラーニングを実践する。また今後の課題として、臨床工学技士志望学生に対しては、現代社会の生命や倫理問題を常に自己の問いとして探求し続ける深い倫理観の涵養と、他者との協働のために必要なヘルスコミュニケーション能力を将来にわたって追い続ける医療人としての責任ある態度の育成とを目指した養成教育が求められるであろう。

引用文献

- 1) Paulo Freire (著) : 小沢有作、楠原彰、柿沼秀雄、伊藤周 (訳), 「被抑圧者の教育学」 亜紀書房, 65 (1979).
- 2) 向後千春 : 「上手な教え方の教科書」, 技術評論社 31 (2015).
- 3) 向後千春 : 「上手な教え方の教科書」, 技術評論社 198 (2015).

参考文献

- [1] Walter Dick、Lou Carey、James O. Carey (著) : 角行之 (訳), 「はじめてのインストラクショナルデザイン」, ピアソンエデュケーション (2004).
- [2] 安林奈緒美 : 「対話的授業の実践ーセルフナラティブの記述の試み」, 日本ヘルスコミュニケーション学会第7回学術集会抄録集, 19 (2015).

Engineering Students — Implementaion of Self-narrative Learning —

Author: Naomi Yasubayashi

Address: A part-time lecturer at Chubu University, 1200 Matsumoto-cho, Kasugai, Aichi 487-8501, Japan.

Keywords: Instructional design, Self-narrative learning, Health communication.

Title: The view of Bioethics of Clinical